

唯識派の提出するダルミンをめぐって

——カマラシーラ著『中観の光』和訳研究(8)——

一 郷 正 道

〈はじめに〉

本稿は、カマラシーラ (Kamalaśīla, ca.740-795 A.D.) 著『中観の光』(*Madhyamaka-Āloka*) の中、対論者の主張 (pūrva-pakṣa)^① 第⑥に対する回答 (uttara-pakṣa) の部分の和訳研究である。

前稿及び本稿において和訳した箇所では、「一切法空性は推理によっても証明できない」とする反論者に対し、それが可能であることを Kamalaśīla は回答している。その際、反論者は、同一性 (svabhāva)、結果 (kārya)、非認識 (anupalabdhi) の証因によってもそれが不可能である、と批判してくる。^③ それに先立ち、ここに提出した部分の pūrva-pakṣa は、中観派が一切法空性を論証するために提出する自立論証には所依不成 (āśrayāsiddha) の誤謬がつきまとうという指摘である。つまり、問題になるのは論証主題 (dharmin)^② の内容である。ダルミンが実在のものでなければ、その推論式は所依不成の誤謬をひきおこし議論がすすまない。しかし、そのダルミンが、立論者、反論者双方に顕現しているもので、言語習慣上 (vyavahāratas) 世間常識と対立しないものであれば、問題はない。

しかし、多くは、或る学派の定説 (siddhanta) にもとづくものが、ダルミンとして提出されてくる。定説にもとづくダルミンでは、真実を確定できない。しかし、それらをダルミンに据えなければ、反論者の見解を否定し、自説を主張することもできない。かかる問題についての Kamalaśīla の見解が、本稿でも明らかにされる。とりわけ、本稿に訳出した部分では、仏教内部、

唯識派の提出するダルミンが議論の主題となっている。

〈前稿までと本稿のシノプシス〉

(対論者の主張) (pūrva-pakṣa)

(回答) (uttara-pakṣa)

I. 「一切法無自性は教証によって証明できない」への回答

(1)①「一切法無自性を説く經典およびその表現は、すべての人に妥当するものではない」への回答

(a)学者は教証に依る

(b)信頼すべき人の言葉は、異教徒にとってではなく、それを教証とする人々にとっては正しい判断基準である

(c)一切法無自性を説く言葉は存在する

(2)②經典にみられる密意の検討

(i)……(xii)

(3)③自照する無二知（自証知）の勝義的實在性を語る無形象唯識説批判

II. 「一切法無自性は理証によっても証明できない」への回答

(1)「直接知では一切法寂靜を覚知できない」への回答

(i)④凡夫の直接知

(ii)⑤ヨーガ行者の直接知

(2)⑥「推理によっても一切法空性を証明できない」への回答

(i)所依不成・自体不成の指摘

(ii)論証は世俗の立場でおこなわれるから可能

(iii)世俗の立場で行使される推論式について

(a)所依不成……ダルミンが実事のものの場合

(b)所依不成の回避……ダルミンは実事のものでなくてもよい

(c)sva-dharmin の意義、効用

(iv)所依不成とプラサンガ論法

(以上が前稿までのシノプシス)

(v)唯識派の提出するダルミンをめぐって

(a)智 (buddhi) をダルミンとする——有相唯識派

(b)智の形象 (ākāra) をダルミンとする——無相唯識派

(vi)定説 (siddhānta) に依っては眞実 (tattva) は確定されない

〈和 訳〉

II. (2)(v) 唯識派の提出するダルミンをめぐって

(a)智 (buddhi) をダルミンとする——有相唯識派

④ また、《外境等がないことを証明せんとする場合、智 (buddhi) という相の事実の論証主題^{ダルミン}が存在する。その(のダルミン・智)が、外的なものとして、又、第一原因 (pradhāna) 等として生ぜしめられるべきものではないことを証明するのである。だから、そこでは、所依不成 (āśrayāsiddha) 等の誤謬はおこらない》、といわれるならば、

(イ) もしそうであれば、「一・多の自性を欠くこと」や「継時・同時によって遍充された効果的作用能力を欠くこと」等は、(ダルミン・智の實在)性を否定する諸証因であるが、もし(それら証因が)そのダルミンにおけるその属性であること(遍是宗法性)が立証されないならば、その場合、それ(証因)によって、そこで意図されている所証の法 (sādhya-dharma) が、どうして証明されるであろうか(証明されないであろう)。(証因が)主題^{バクシヤ}の属性でもないのに、必然的關係にあるというだけの所証の証因では、所証を正しく証明することはできない。そうであれば(必然的關係にあるということだけで証明できるとすれば)、⑦「眼の対象(であるゆえに、という証因)」でも、「音聲」というダルミンの「無常性」をどうして証明しないことがあるうか。もしそれら(証因)が、その(のダルミン)における(属性であることが)立証されると承認されるならば、その場合、外的なものや第一原因等と同様、智そのものが、「(効果的作用)能力」、「一・多(の自性)」といった、

「実在」に遍充する属性を欠いているから、無自性である（P. 190a）、と立証されるのである。それら（証因）は、それ（ダルミン）の属性であるゆえに。（「効力を欠く」「一・多の自性を欠く」とは）別の属性が、反論者に成立しているわけでもないし、効力等を欠くようなものは、全くなんら成立していない。そうでなければ（成立していたら）、それによって、外的なものや第一原因等も、無自性であることは証明されない。しかし、それが無自性であると立証されれば、（D. 174a）所依不成等の誤謬^⑧も以前と同じ条件のもとにあり、私の主張がくずれることにもならない。

（ロ）智が外的なものとして、また、第一原因等として生ぜしめられるべきものではないことは、証明しおわったけれども、反論者の妄想の所産である第一原因等の本性が存在しないことについてはまだ証明していない。そ（の第一原因等の本性）の形象は（智とは）別のものであるゆえに。それ（第一原因等の本性がないこと）が証明されなければ、「反論者の妄想の所産である第一原因等は存在しない」という命題が、「存在しない」と表現されるとしてもどうして成立しようか（成立しない）。（智とは）別の属性（第一原因等の自性）が、勝義として成立しているとき、反論者にとって、そうでないあり方（「存在しない」）の言説が付せられることは不合理なことである。

（ハ）或る無知な人が、非擇滅（apratīsamukhyānirodha）等の三無為（asaṃskṛta）——誰にとっても生成するものとしては存在しない、勝義として実在と妄想されている——が存在しないことを論証せねばならないとき、どうして智がダルミンとなるであろうか。反論者は、その（三無為の）中に、それ（智）によって生ぜしめられるもの、という属性があることを承知していないからである。それゆえ、それ（三無為）がないことは、決して証明されないのである。

（b）智の形象（ākāra）をダルミンとする——無相唯識派

もし《無始爾來の自己の種子が成熟して生じた分別によって形成されたものであり、愚人によって外的なもの、実有なものとして仮説されたものであ

り、智の中に実在するもの、(それ)が、ダルミンである。それゆえ、それ(ダルミン)に依拠して第一原因(pradhana)等を否定する。それは、勝義として無自性であるが、迷乱によって、外的なものの如き、(P. 190b)第一原因等と異ならない如き、効力を欠いている等のあらゆる属性を有する如きもの、と分別される。その場合、第一原因等の自性がないことを証明するにあたって、第一原因等を否定する所証と能証は、根拠(gāi)を同じくするばかりでなく、しっかり確立している。なんとすれば、それ(ダルミン)は、愚人たちによって外的なもの、第一原因等として把握され、立論者、反論者とも、眼病者が月を二つと見るように、(それ、ダルミンを)それ(ら外的なもの、第一原因等)と異ならないものと考えて、言説を付しているからである。(D. 174b)それ(ダルミン)は、智によって遍計されたものであるが、それ(智)の形象であるがゆえに、智と仮説されていて、これは、一次的には智そのものではない。それ(ダルミン)は、それ(智)と相を異にするものとして顕現しているゆえに。それゆえ、それ(ダルミン)を無自性と立証しても、智が無自性であることにはならない。その場合、外的なもの、第一原因等の自性の否定は、プラマーナによって論証されるが、それ(ダルミン^⑪、智の形象)自身の否定のためには(同じ)証因は適用されない。

外的なものであるダルミンの音聲等——実有として現にある——に、無常等のダルマがあることを立証するとき、かの智の中に実在するダルミン——外的な音聲等と異ならないものとして仮説されている——に完全に依拠して(論証を)おこなっている。なんとすれば、外的な音聲等は、空間、時間、状況的に(内的な智の形象のダルミンとは)異なるものとして確立しており、立論者、反論者の智の中に、自性としてありありと(pratyakṣatas)顕現しているものではないからである。さらに、これ(音聲)は分割できないものであるから、所証、能証というグルマの区別がありえないからでもある。

それゆえ、推理されるべきもの、推理等のこれらすべての言説は、智の中に実在するダルミンのみに依っておこっている。他のあり方はありえないゆえに》と主張してくるならば、(次のように回答する)。

もし (P. 191a) そうであれば、勝義としては無自性でもあり、遍計されたダルミンに依って (外的なものの、第一原因等の) 否定等を立証しても、所依不成等の誤謬が (生ずる、と我々は言ってい) ないのに、どうして、しつこく我々を批判するのか、

ちょうど、汝が、勝義に悟入させるために、第一原因等を否定するにあたって、正に遍計されたダルミンに (依って) 所証と能証についての考察をくわしくおこなうように、我々も、世間でしられた色・聲等が、有性、無性等として増益されていることを否定するにあたって、愚人に対し、それらが、幻、かげろう、夢、映像と等しいものだと教える。その場合、(汝の言う) 遍計されたダルミンが実有のものとして増益されていることについては否定しつくしているが、(そのダルミンは) 立論者と反 (D. 175a) 論者の双方に顕現しているものであるから、不成等の誤謬は生じない。それと同様に、(我々の否定する) 色等も、牛飼いの妻に至る人間にまで顕現しているものであるから、(その否定が) どうして不成 (の誤謬) となろうか (なりはしない)。顕現とは、何かによってそれが否定されれば減してしまうようなものであって、真実 (satya) を自性とするものによって遍充されるものでもない。虚妄なものでも顕現はしているから。そうでなければ、一切の人が真実 (tattva) を見ることになってしまう。真実なものだけが顕現することになるのだから。

遍計されたダルミンについても、無自性であることを正しく論証するために、「効力を欠く (ゆえに)」等のダルマの提示による遍充関係によって、第一原因等についてそれ (無自性) を立証する。そのように、我々は、実有のもの (bhūta) と遍計されているあらゆる存在についてそれ (無自性) を立証するために、「実有のもの」 (と遍計されているもの) について、「効力がない」などと語っても、どうして (無自性を) 証明できないことがあろうか。

II. (2)(vi) 定説 (siddhānta) に依っては真実 (tattva) は確立されない

(a) さらにまた、識者たちが承認するのは、吟味 (P. 191b) しおわったも

のことであって、^⑬…（吟味しおわって）存在の自性を確定するならば、（それは）いいが、吟味中のものについては（存在の自性を確定するの）はよくない。それ（吟味中）だからそれ（存在の自性）はまだ確定していないし、吟味もそれ（存在の自性）を確定するためのものだからである。それゆえ、プラマーナによって真実（tattva）を確定する場合、だれもがまだ定説（siddhānta）として承認しているわけではないから、その場合、或る（命題）について、所依不成のゆえに、ダルミンは成立しない、云々と議論（しては真実であることを確定）するのである。

（b）もし《この真実は、立論者自身によって前もってプラマーナによって確立された上で、他人にそれを証明せんとして、現われるものであるから、したがって、それ（真実）は、定説（siddhānta）として承認される以前に決定している》というならば、それも正しくない。（立論者）自身が理解する段階では、定説としてまだ承認されていないからである。前もって定説として承認されておらず、立論者自身が或るプラマーナによって真実を理解するその同じプラマーナによって、（真実を）他人に理解させるのであるから、どうして、定説として承認されている、といえようか。彼自身が前もってプラマーナで真実であることを確定するのであるから、他人に対して定説によって（真実を）理解させることも成り立たないし、他の識者もそれ（定説）の言葉だけで、プラマーナのない（D. 175b）内容を信用するはずはない。それゆえ、自分で確立する時と同じように、他人に説明する時でも、同じであるから、どんな場合でもプラマーナによってこそ真実は確定されるのであるから、だれもが定説として承認しているわけではないから、どうしてそれ（定説）によって、ダルミンは成立しない、云々といえようか。

（c）正しいプラマーナによって立論者の主張する所証を証明するのであるが、定説として承認されていることを理由に、その場合それは拒斥される、と言ったとき、いかなる他の論理があるであろうか。存在の真実を考察する場合、定説（P. 192a）において真実とされているようなダルミンを根拠とする人は、誰一人いない。そのようなダルミンは、立論者と反論者双方のどこにも

成立しないからである。実に、仏教徒などが音聲等のダルミンは大種 (bhūta) 所造であると主張する如く、そのようにはヴァイシェシカは (主張) しない。かれらは、それを虚空のグナとして仮説しているからである。それゆえ、そのようなダルミンは成立しないから、だれも、どこにおいても (定説にもとづいては) 論証をおこさない。もし、そのようなダルミンが成立するならば、そのダルマも両者に成立しているはずだから、論争はおこらない。

(d)それゆえ、真実を理解せんとする人は、すべて、学説 (mata) によって成立する特定のダルミンをしりぞけて、牛飼いにまでしられている世間の常識だけにもとづいて、所証と能証の考察をくわしくおこなう。それゆえ、定説 (siddhanta) にもとづいて所依不成等があるなどと語ることは、的はずれである。言語習慣上も成立していないダルミン等について、これ (所依不成) を語ることはいいが、我々にとって、色等は、言語習慣上も成立していないことはない。

〈解 説〉

(v)―(a)

(イ) 或る唯識派が唯識を確立する推論式を構成するとき、ダルミン (論証主題) に智 (buddhi) を提出し、それを実有だという。そして、その智が、外的なもの、または第一原因 (pradhāna) として生ぜしめられるべきものでないことを論証せんとする。

この、ダルミン、智の「実有」の内容についての説明はなくはっきりしないが、後出 (b) の唯識論者の見解を無相唯識論者のそれに比定することが可能だとすれば、ダルミンの智を実有とするこの唯識論者として、有相派を想定しうる。そして、ダルミンを「有」とするということは、Dignāga の立場と一致する。したがって、この唯識派の見解では、ダルミンたる智が実有であるから所依不成の誤謬などには陥らない。だから、Kamalaśīla が考えるような所依不成という誤謬の回避策は必要ない、というのがここの反論者、

唯識派の立場といえる。これまで『中観の光』で、Kamalaśīla はダルミンに、増益されたもの、中観派からすれば非実在と見なせるものを据えても、所依不成の誤謬を回避する方法を論じてきた。ここへきて、仏教徒の有相唯識派が、自ら実有とみなす智をダルミンに提出してくることに對して、Kamalaśīla の見解が問われることになった。中観派にとって非実有なものをダルミンに据えても所依不成の誤謬に陥らないことを可能にした二条件は、智をダルミンにした場合は、不要なことか、それとも有効であるのか。

因みに、その二条件とは、1) ダルミンは所証の法に一致するダルマをもつこと、2) 所証も証因も絶対否定を内容とする、というものであった^⑭。

この有相唯識派に対する Kamalaśīla の反論は次の如くである。もし、有相唯識派が「智は外的なものとして、また、第一原因として生ぜしめられるべきものではない」ということを証明したいならば、その推論式は、「一・多の自性を欠くゆえに」乃至「繼時的、または一時に遍充される効果的作用を欠くゆえに」といった証因をもたねばならない、という。つまり、遍是宗法性が確立して、はじめて唯識派の主張は可能になる、というわけである。

前稿で述べたように、非仏教徒たちによって増益されたもの、たとえば虚空等をダルミンにして「虚空は、効力に妨げがない、常住の、同一自性の、ものではない」という命題をたてたときダルミン、虚空の属性として、証因は「音聲等の果を一時に成就しないゆえに」と表現されていた。つまり、ダルミンたる虚空は、無常性を内容とする固有な属性 (sva-dharma) をもつもの (sva-dharmin) でなければならなかった。

智 (buddhi) をダルミンに据える場合に、その実有性を否定すべきことを前提にしているのは、それによって、Dignāga の立場を否定、越えるのであるが、虚空をダルミンにした場合と同じことがいわれていることになる。

非仏教徒であれ、仏教徒の有相唯識派であれ、彼らにとっては実有であるが中観派にとっては非実有なものをダルミンに提出するとき、ダルミンと所証の法との間に、一致、相應の關係が、あるいは、ダルミンと証因との間には遍是宗法性の關係が、成立していなければならないことを、カマラシーラ

は確認していることになる。そうであれば、ダルミンは、暗に、無自性であることが要求されていることになる。逆に、ダルミンが無自性であることを証明するために、前記二条件が用意されねばならなかった、ということになる。

(ロ) 唯識派は、智をダルミンにして三界唯心、唯識無境を主張しようとしたが、さらに、自説を確認するためには、第一原因そのもの、第一原因の自性の否定を証明せねばならない。なんととなれば、唯識派にとっては、智こそが根源的な存在であって、異教徒の考える、世界を構成する第一原因等の存在を認めるわけにはいかないはずだからである。

その際、唯識派としては、(宗) 第一原因の自性は存在しない、(因) 智とは別のものであるゆえに、といった推論式を構成して、第一原因の自性を否定しようとする。しかし、反論者の第一原因の自性は、智とは関係なく勝義として存在する。これでは推論式は成立せず議論にならない。そこで、前稿で述べたように、虚空等の存在を否定する推論式においては、その証因が「音聲等の結果を一時に発しないゆえに」と絶対否定の表現をとることが必要とされた。ダルミンとなる虚空、第一原因いずれも恒久不変のものとみなされている。今、その「第一原因は存在しない」という命題において、所証の法は「存在しない」と絶対否定の表現をとっており、証因も絶対否定の表現をとることが必要とされるわけである。

(ハ) それと同じことは、智をダルミンにして三無為を否定しようとする場合にもいえる。唯識派は、多分、(宗) 三無為は存在しない、(因) 智によって生ぜしめられるものであるゆえに、といった推論式を提出する、と想定できる。しかし、ここでも、同様に、三無為と智とはそれぞれ全く関係ないものとして実在する、と立論者、反論者とも考えている。従って、恒久不変の三無為を否定するには、その推論式の証因が絶対否定の表現をとるものでなければならない。

以上、有相唯識派が唯識を確立するために智をダルミンにして推論式を構成しようとするとき Kamalaśīla は、そのダルミン、智の実有性を認めない。

ダルミンが実有のものであることは Dignāga の基本的立場であった。しかし、それを否定、越えていかななくては、唯識派自身の主張も成立しなくなる、と考える。すなわち、有相唯識派は、智をダルミンにして、異教徒の妄想する第一原因の自性が存在しないこと、また、三無為が実有の外境として存在しないことを証明せねばならない。しかしダルミンの智が実有であれば、それらを証明できない。

ダルミンは非実有のものであってよろしい。非実有であるが、恒久不変のものとしてそのダルミンが無自性であることを証明するためには、所証と能証が絶対否定でなければならない、という条件が適用されるべき、という Kamalaśīla の見解は、有相唯識派を反論者にした場合も有効となる。

(v)→(b) 次の反論者の見解は、比較的長い pūrva-pakṣa の中に示される。その反論者である唯識派が提出するダルミンは、智のなかに存在するもので智そのものではない、分別によって形成されるものであり、愚人によって外的なもの、実有のものとされているものである。さらに、勝義としては無自性であり、智の形象であり、智によって遍計されたもの、と説明される。

これは、Tillemans が指摘する⁽¹⁶⁾ように、無相派の見解にもとづくダルミンの内容といえよう。

無相唯識派が、勝義として無自性で、遍計された智の形象を、ダルミンとして提出することについては、中観派 Kamalaśīla としても異存はなく、「どうして、しつこく我々を批判するのか」といって、無相唯識派の立場に同調している。なんとすれば、Kamalaśīla は前稿で述べた如く、反論者が⁽¹⁷⁾増益したもの、中観派にとって非実有なものをダルミンに提出しても、所依不成の誤謬にならない方法を論じおわっているからである。

この場合、無相唯識派が、智の形象をダルミンとして提出し、それは勝義として無自性であり、遍計されたものとしてその実有性は否定されているが、それがダルミンとして許されるのは、それが立論者、反論者双方に「顕現している」ものだからである。それによって、所依不成の誤謬にならないこと

をもカマラシーラは指摘している。

また、この無相派の提出するダルミンは有なるものとして遍計されているが、それが無自性であることを論証するには、「効力を欠くゆえに」といった絶対否定の表現をとる証因の存在が必要であることを、Kamalaśīla は念を押している。

以上、有相、無相唯識派がそれぞれ提出してくるダルミンにもとづいて推論式を構成したとき、それが所依不成の誤謬を回避するための方法が議論された。Kamalaśīla の立場は、一貫して、前述の二条件にもとづくものであることが確証された。

(vi)

真実は、自分で理解するときも他人に教示する場合も、ブラマーナによって確立されたものでなければならない。或る学派の承認する定説 (siddhanta) によっては真実は確定されない。したがって、或る定説に依って、ダルミンは不成であるなどということでは、真実は確定しない。換言すれば、定説で真実とされるものをダルミンにして、その真実性を検討することはできない。

従って、所依不成という誤謬も定説にもとづくものであってはならない。そうであれば、ダルミンとして提出しうるのは、牛飼いにまで知られたもの、世間の常識を逸脱しないものでなければならないことになる。それは、立論者、反論者双方に顕現しているもの、言語習慣上成立しているもの、ということになる。であれば、次の如き、Śāntarakṣita の立場がそのまま継承されていることは明白である。

定説にもとづいて提出された特別の [所証や喩例の] 主題 (ダルミン) を除いて、智者、そして婦人、子供にいたるまでの人々に是認されている諸存在にもとづく

所証と能証との関係は、すべての [論] 者に、正しいものとして認められている。そうでないならば、指摘される如き所依不成等 [の誤謬] となろう。

(MA 第76,77偈)

私は、[眼等の知識に] 顕現する性格のもの（であるかぎり、それら）を否定するのではない。それゆえ、設定された所証や能証に混乱はない。

(MA 第78偈)

その上で、Kamalaśīla の立場は、繰り言になるが次のようになる。議論をすすめるにあたって、反論者たちが増益しているもの等がダルミンとして提出されなくてはならない。それらは、定説にもとづくものである。それらをダルミンに据えて議論を可能にし、それが所依不成の誤謬に陥ることを回避するためには、しばしば言及した二条件が用意されねばならなかった、というのが Kamalaśīla の見解であったといえよう。

〈注〉

- ① pūrva-pakṣa のシノプシスについては一郷 [1991] pp. 266-272 参照。
- ② 一郷, 「カマラシーラによる所依不成回避の方法——カマラシーラ著『中観の光』和訳研究(7)』『インドの文化と論理——戸崎宏正博士古稀記念論文集』(印刷中)
- ③ 一郷, 「カマラシーラの無自性論証と証因 (hetu) ——カマラシーラ著『中観の光』和訳研究(9) ——」『大谷学報』(印刷中)。
- ④ C. 173a2, D. 173b2, N. 181b3, P. 189b3
- ⑤ D: gcig, P: cig
- ⑥ P: med na mi'byuñ ba tsam (kho na yis yañ bsgrub par bya ba med na mi 'byuñ ba tsam) kho na'i gtan tshigs D版は () 内を省く。D版に従う。
- ⑦ D: mig gi yul, P: mig yul
- ⑧ de'i so na 'dug pa; *Prasannapadā* の索引 [Yamaguchi 1974] に、対応する Skt. として tadavastha が出る。
- ⑨ 以下に比較的長い、無相唯識派からの反論がある。この反論及び回答の箇所については、次の論文に部分訳がある。小林 [1987] pp. 210. 26-209, 4; Tillemans and Lopez [1998] pp. 123-125 (24); 森山 [1998] p. 320
- ⑩ D: ñe bar bzuñ ba, P: ñe bar bzuñ la, Tillemans and Lopez [1998] は、テキストはデルゲ版のみを提示し (p. 123), 訳では and を入れ接続の意味で訳している (p. 124)。北京版に従えば問題ない。
- ⑪ Tillemans and Lopez [1998] p. 124, 45 は、智 (mind) としている。
- ⑫ D: de log pa na ldog par 'gyur ba bden, P: de log par 'gyur ba bden
- ⑬ D: 'og tu yin la / de'i bdag ñid, P: 'og tu yin te / dños po'i bdag ñid
- ⑭ 注②に示した拙稿 p. 22
- ⑮ 注②の拙稿

⑩ Tillemans and Lopez [1998] p. 123, n24

⑪ ⑭参照。

〈参考文献と略号〉

C : チョーネ版

D : デルゲ版

一郷 [1985] : 一郷正道, 『中観莊嚴論の研究』 文栄堂

[1991] : カマラシーラ著 『中観の光』 和訳研究 (1), 京都産業大学論集第20巻第2号

小林 [1987] : 小林守, 無自性論証と所依不成 (aśrayasiddha) の問題——カマラシーラの『中観明』を中心として——, 『文化』 第50巻, 第3・4号—秋・冬—

MA : Madhyamakalamkāra of Śāntarakṣita, cf. 一郷 [1985]

森山 [1998] : 森山清徹, カマラシーラの無自性論証とアポーハ論——自立論証の根拠——『印度學佛教學研究』 第47巻第1号

N : ナルタン版

P : 北京版

Tillemans and Lopez [1998] : What can one reasonably say about nonexistence? A Tibetan work on the problem of Āśrayasiddha, *Journal of Indian Philosophy* 26

Yamaguchi [1974] : S. Yamaguchi, Index to the Prasannapadā Madhyamakavṛtti, Heirakuji-Shoten